

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド,
II, 1, 1—3, 6; 5, 1—19

湯 田 豊

以下において、わたくしはブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの第2章を言語的に分析し、サンスクリットから日本語に翻訳したいと思う。しかしながら、本章のなかの一部分第4節 (caturtha brāhmaṇa) を、わたくしは以前に翻訳した。それゆえに、ここでは II, 4, 1—14 を、わたくしは扱わない。更に第2章第6節 (ṣaṣṭha brāhmaṇa) は、師と弟子の系譜 (vaṁśa) の記録である。この系譜に関する検討も、わたくしはここでは行なわなかった。本章のその他の箇所¹⁾ に関して、わたくしは以下において言語的な検討を試みたい。

II, 1, 1—dr̥ptabālākir hānūcāno gārgya āsa sa hovācājātaśatruṃ kāśyaṃ brahma te bravāṇīti sa hovācājātaśatruḥ sahasram etasyāṃ vāci dadmo janako janaka iti vai janā dhāvantīti ||

II, 1, 1—15 において、バラモンのガールギヤおよびクシャトリヤのアジャータシャトル王は、ブラフマン (brahman) について対話している。わたくしは、まず最初に両者の対話について少しばかり検討しよう。

シャンカラの注釈によれば、dr̥ptabālāki は balākā の子孫を意味する。しかし、dr̥pta には“高慢な”という意味もある。なぜ、バラカーの子孫が高慢であるかと言えは、彼が正しいブラフマンの知識を有しないからである——このようにシャンカラは注釈している (dr̥ptabālākir dr̥pto garvito 'samyagbrahmavittvād eva)。Anūcāna について、シャンカラは anuvacanasamartho vaktā vāgmī と注釈している。しかし、わたくしは anūcāna をここでは単に“学問がある”，あるいは“学識の深い”と訳したいと思う。もちろん、ここではヴェーダおよびヴェーダの補助学を暗誦出来るほどそれらに精通している人を、われわれは anūcāna と

呼ぶ。チャンドーギヤ・ウパニシャッド VI, 1, 2 に, *anūcānamānī* という文句が見いだされる。この言葉を, わたくしは “学問があると思
い”²⁾ と翻訳したことがある。それゆえに, わたくしは *anūcāno gārgya*
を “学問のあるガールギヤ” と訳したい。Dr̥ptabālākīr hānūcāno gār-
gya āsa を, わたくしは「ドリプタバーラーキは, 学問のあるガールギヤ
であった」と訳そう。

さて, わたくしは *sa hovācājātaśatruṃ kāśyaṃ brahma te bravāṇīti*
という文句を検討しよう。言語的には, 問題になる箇所は存在しない。わ
たくしの興味をそそるのは, ガールギヤがアジャータシャトル王に対して
「わたくしは, あなたにブラフマンについて語ろう」と言っている箇所
である。ブラフマン (*brahman*) が果たしてウパニシャッドの主要テーマか
否かは, 大いに疑問である。しかし, 今わたくしが扱っている箇所におい
て, ガールギヤがブラフマンを主要テーマとみなしていることは確実であ
る——*sa hovācājātaśatruṃ kāśyaṃ brahma te bravāṇīti*。この文句
を, わたくしは「『わたくしは, あなたにブラフマンについて語ろう』, と
彼 (ガールギヤ) はカーシィー (=ベナレス) 王アジャータシャトルに言っ
た」と訳そう。

*Sa hovācājātaśatruṃ sahasram etasyāṃ vāci dadmo janako janaka
iti vai janā dhāvanti*——この文句に関して, わたくしは若干の指摘を
したい。シャンカラの注釈によれば, *sahasra* (1000) は 1000 頭の牛を意
味する。ブラフマンに関する正しい知識をガールギヤが伝えるならば, ア
ジャータシャトル王はその報酬として彼に 1000 頭の牛を与えることを約
束する——*sa hovācājātaśatruṃ sahasram etasyāṃ vāci dadmo*。『こ
の言葉に対して, われわれは 1000 (頭の牛) を与える』, とアジャータシャ
トルは言った」と, このように, わたくしは訳そう。

Janako janaka iti vai janā dhāvanti という文句において, われわれ
は言葉の遊び, あるいは頭韻を見いだす。確かに ヴィデーハ王ジャナカ
(*Janaka*) は寛大な王として有名である。しかし, ここでは *janako janaka*
... *janā* という文句は, 頭韻以外の何ものでもない。この文句は, ガー
ルギヤおよびアジャータシャトルの対話において何の役割も演じない。結
局, II, 1 において問題になるのは, 「『わたくしは, あなたにブラフマン
について語ろう』と彼はカーシィー王アジャータシャトルに言った」とい

う文句, および「『この言葉に対して, われわれは 1000 (頭の牛) を与える』
という文句だけである。

II, 1, 1 (訳)——ドリプタバーラーキは, 学問のある ガールギヤであ
った。「わたくしは, あなたにブラフマンについて語ろう」, と彼 (ガ
ールギヤ) はカーショー王アジャータシャトルに言った。「この言葉に
対して, われわれは 1000 (頭の牛) を与える」, とアジャータシャトル
は言った。

II, 1, 2——sa hovāca gārgyo ya evāsāv āditye puruṣa etam evā-
haṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃ-
vadiṣṭhā atiṣṭhāḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ mūrdhā rājeti vā aham
etam upāsa iti sa ya etam evam upāste 'tiṣṭhāḥ sarveṣāṃ bhū-
tānāṃ mūrdhā rājā bhavati ||

Sa hovāca gārgyo yo evāsāv āditye puruṣam etam evāhaṃ brah-
mopāsa iti という文章において特に注目し値するのは, *upāsa* という語
形であろう。Upāsa は, *upa-āse* に分析することが出来る。Āse は, 第
2 類, Ātmanepada, 現在形, 1 人称単数である。それゆえに, *yo evāsāv*
āditye puruṣam etam evāhaṃ brahmopāsa iti と用いられる。もちろん,
upāse iti が *saṃdhi* において *upāsa iti* となったのである。しかし問題
は, 文法上の形ではない。Upās の意味が問題である⁸⁾。マクス・ミュラ
ーは, *upās* を *adore*, ドイッセンおよびベートリンクはそれを *vereheren*
と訳している。しかし *upās* は, 決して *vereheren* すなわち “崇拜する”
という意味ではない。ラダクリシナンは, *upās* を *meditate* と訳してい
る。私見によれば, *vereheren* よりも *meditate* の方が *upās* の原義に近
い。ちなみに, スナールは *etam evāhaṃ brahmopāsa iti* を *c'est que*
je considère comm Brahman と訳している。スナールの訳は独特である。
Upās を...とみなす, 知る, 認識する, 瞑想するなど訳すことは可能
である。Upās の元来の意味は, おそらく “近くに坐る” であろう。しか
し人間の “近くに坐る” のではなく, 事物の “近くに坐る” ことが原義
であったのであろう。ある事物を “熱心に求める”, “得ようと努力する”

というのが *upās* ないし *upāṇisad* の本来の意味であろう。このような意味を念頭に置けば、われわれは *etam evāhaṃ brahmopāsa iti* を、「まさにこれを、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と訳してもよいのではなかろうか？ あるいはむしろ、われわれは「まさにこれを、わたくしはブラフマンとして熱心に求める」と訳してもよいのかもしれない。シャカラ自身は当該の箇所に関して *etam evāhaṃ brahma paśyāmy asmin-kāryakaraṇasaṅghāta upāse* と注釈している。ここのシャカラの注釈を、わたくしは次のように訳したい——「この身体および器官の集まりにおいて、まさにこれをわたくしはブラフマンとみなす、すなわち、ブラフマンとして瞑想する」と。

さて、わたくしはふたたび最初の文句に戻ろう。Sa hovāca gārgyo ya evāsāv āditye puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti を、わたくしは次のように訳したい——「ガールギヤは言った——『あの太陽のなかの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する』と」。

このガールギヤの発言に対して、アジャータシャトル王は次のように答える——*sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhā*, と。王は更に答えるが、ここでわたくしはこの部分だけを簡単に考察しよう。そして、それから次の文章へ、わたくしは進もう。Sa hovācājātaśatrur——アジャータシャトルは言った。Mā maitasmin saṃvadiṣṭhā——*saṃdhi* を無視してこの文句を復元すれば、*mā mā etasmin asaṃvadiṣṭhāḥ* というテキストが得られるであろう。この文章の意味は次の通りである——「いや、彼について、あなたは語らないように！」と。

このように言うてから、アジャータシャトルは更に続けて次のように言う——*atiṣṭhāḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ mūrdhā rājeti vā aham etam upāsa iti*, と。Atiṣṭhāḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ というのは、すべての存在(=生きている存在)よりも優れているものを指し示す。上のテキストを、わたくしは次のように訳す——「わたくしは、すべての存在のなかの優れたもの、頭、あるいは王として彼を瞑想する」と。そして、このパラグラフの終わりにおいて、アジャータシャトルは次のように言う——*sa ya etam evam upāste 'tiṣṭhāḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ mūrdhā rājā bhavati*, と。ここで注目にあずかるのは、*sa ya etam evam upāste... bhavati* という表現である。われわれは、ここでシャタパタ・ブラーフマナ XIII,

5, 2, 20 の文句, *taṁ yathā yathopāśate tad eva bhavati* を思い出す。この文句を, シャンカラは注釈において引用している。ウパニシャッドにおいては *upāsana* は結果を生み出す実用的な瞑想である。Sa ya etam evam upāste 'tiṣṭhāḥ sarveṣāṁ bhūtānāṁ mūrdhā rājā bhavati を, わたくしは次のように訳す——「彼(=プルシャ)をこのように瞑想する人は, すべての存在のなかの優れたもの, 頭, 王になる」と。アジャータシャトルはブラフマンを“人間”, あるいは太陽の内部に宿る“人間”, あるいは“精神”として理解し, この人間をすべての存在のなかの優れたもの, 頭, あるいは王として瞑想する。

II, 1, 2 (訳)——ガールギヤは言った——「あの太陽のなかの人間, まさに彼を, わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや, 彼について, あなたは語らないように! わたくしは, すべての存在のなかの優れたもの, 頭, あるいは王として彼を瞑想する。彼をこのように瞑想する人は, すべての存在のなかの優れたもの, 頭, 王になる」と。

II, 1, 3——*sa hovāca gārgyo ya evāsau candre puruṣa etam evāhaṁ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin samvadiṣṭhā bṛhan pāṇḍaravāsāḥ somo rājeti vā ahaṁ etam upāsa iti sa ya etam evam upāste 'ahar ahar ha sutaḥ prasuto bhavati nāsyānnaṁ kṣiyate ||*

II, 1, 2—13 において, われわれは同じような繰り返しに接する。太陽のなかの人間に言及した後で, ガールギヤは月のなかの人間をブラフマンとして瞑想する(=熱心に求める)——*sa hovāca gārgyo ya evāsau candre puruṣa etam evāhaṁ brahmopāsa iti*. ガールギヤは, 最初太陽のなかの人間をブラフマンとして提示したが, アジャータシャトルによって拒絶された。そこで彼は, 月をブラフマンであるとみなす考えを示した。それゆえに彼は言う——「ガールギヤは言った——『あの月のなかの人間, まさに彼を, わたくしはブラフマンとして瞑想する』, と」。これに対して, アジャータシャトルは次のように答える——*sa hovācājātaśatrur mā maitas-*

min samvadiṣṭhā bṛhan pāṇḍaravāsāḥ somo rājeti vā aham etam upāsa iti, と。更に続けて、彼は次のように言う——sa ya etam evam upāste 'har ahar ha sutaḥ prasuto bhavati nāsyānnaṃ kṣīyate, と。

Sa hovācājātaśatrur mā maitasmin samvadiṣṭhā は、前者と同じ繰り返し返しである——「アジャータシャトルは言った——『いや、彼について、あなたは語らないように!』」と。なぜ、アジャータシャトルはそうに言ったのであろうか？ 答えは、その直後の文章のなかに見いだされる——bṛhan pāṇḍaravāsāḥ somo rājeti vā aham etam upāsa iti. Bṛhat を、わたくしはここで偉大であると訳そう。Pāṇḍaravāsāḥ について、シャンカラは pāṇḍaram śuklaṃ vāso yasya so 'yaṃ pāṇḍaravāso と注釈している。それゆえに、わたくしは pāṇḍaravāsāḥ を“白衣を着ている”と訳した。Soma rājā は、“ソーマ王”である。もちろん、ソーマ王は月と同義語として使用されることが多い。Bṛhan pāṇḍaravāsāḥ somo rājeti vā aham etam upāsa iti を、わたくしは次のように訳す——「偉大な、白衣を着ていソーマ王として、実に、わたくしは彼を瞑想する」と。月をブラフマンとして瞑想するガールギヤの考えを退けて、アジャータシャトル王は月のなかの人間を偉大な、白衣を着いていソーマ王として瞑想した。

いずれにせよ、“瞑想”(upāsana)が結果を生み出す知的行為であることは明らかである。Upās は“熱心に求める”ことである、そのような知的努力は、特定の結果を生む——sa ya etam evam upāste 'har ahar ha sutaḥ prasuto bhavati nāsyānnaṃ kṣīyate. Sa ya etam evam upāste は ya evaṃ veda と同じようにウパニシャッドの定型の一つである。「彼をこのように瞑想する人は」(sa ya etam evam upāste) という定型は、当然、「彼をこのように熱心に求める人は」ということを含蓄する。しかるに、sa ya etam evam upāste を、ミュラーは Whoso adores him thus, ドイッセンは Wer diesen also verehrt, ベートリンクは Wer diesen auf diese Weise verehrt, ヒュームは He who worships him as such と訳している。スナールは sa ya etam evam upāste を Celui qui le considère ainsi と訳している。ラダクリシナンは He who meditates on him as such と訳している。わたくし自身の訳はラダクリシナンの英訳に近いけれども、upās を“瞑想する”と翻訳することが適切か否かつについて

は疑問が残る。しかし、ここでは upās を、わたくしは“瞑想する”と訳した。

Ahar ahar ha sutaḥ prasuto bhavati に関して問題になるのは sutaḥ および prasutaḥ の区別であろう。わたくし自身は、sutaḥ を“しぼられた”, prasutaḥ を“更にしぼられた”と訳した。しかしソーマ祭においてソーマの汁がしぼられる方法には区別がある。ここでは、わたくしはソーマ祭におけるソーマの汁のしぼり方に言及しない。しかしシャンカラは、その注釈において主要な祭祀 および 補助的な祭祀の区別に言及して、sutaḥ および prasutaḥ の相違を指摘した——ahar ahaḥ sutaḥ somo 'bhiṣuto bhavati yajñe prasutaś ca vikāreṣv... 日々 (ahar ahaḥ), 彼のためにソーマがしぼられ、更にしぼられる時、「その人にとって、食物は尽きない」(nāsyānnaṃ) のである。Sa ya etam evam upāste 'har ahar ha sutaḥ prasuto bhavati nāsyānnaṃ kṣiyate を、わたくしは次のように翻訳しよう——「彼をこのように瞑想する(=熱心に求める)人、彼のためにソーマは日々しぼられ、更にしぼられる。彼にとって、食物は尽きない」。

II, 1, 3 (訳)——ガールギヤは言った——「あの月のなかの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！偉大な、白衣を着ているソーマ王として、実に、わたくしは彼を瞑想する。彼をこのように瞑想する人、彼のためにソーマはしぼられ、更にしぼられる。彼にとって、食物は尽きない」と。

II, 1, 4——sa hovāca gārgyo ya evāsau vidyuti puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhās tejasvīti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste tejasvī ha bhavati tejasvinī hāsyā prajā bhavati ||

Sa hovāca gārgyo ya evāsau vidyuti puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhās——この文句は、前節のそれとほとんど同じである。前節においては、asau candre

puruṣa という文句が見いだされる。ここでは, asau vidyuti puruṣa という文句が存在する。第2節においては, asāv āditye puruṣa という文句が見いだされる。太陽のなかの人間, および月のなかの人間をブラフマンとして瞑想することをアジャータシャトル王に拒否され, ガールギヤはここで“電光”(vidyut)のなかの人間をブラフマンとして提示する。しかし, これもまたアジャータシャトルによって拒絶される。アジャータシャトルは次のように言う——tejasvīti vā aham etam upāsa iti, と。Tejas は輝き, 熱, 光, エネルギーなどを意味する語である。Tejas-vin は, tejas を有しているというほどの意味である。Tejasvīti vā aham etam upāsa iti を, わたくしは「実に, わたくしは彼を輝いているものとして瞑想する」と翻訳する。ガールギヤが電光のなかの人間をブラフマンとして瞑想したのに対し, アジャータシャトルは電光のなかの人間に言及しながら, 「実に, わたくしは彼を輝いているものとして瞑想する」と言っている。

Sa ya etam evam upāste tejasvī ha bhavati tejasvinī hāsyā prajā bhavati——ここにおいても, われわれは *upās* および *bhavati* の関連に注目しなければならない。しかしプルシャを輝いているものとして瞑想する人が, なぜ, 自己および自己の子孫のために実り豊かな結果を約束されるのか, 判然としない。シャンカラの注釈によれば, 電光の多様性が承認されているゆえ, 自己および自己の子孫において果報の豊かさがある——vidyatām bahutvasyāṅgikaraṇād ātmani prajāyām ca phalabāhulyam. しかし, このシャンカラの解釈が正しいか否かは疑わしい。とにかく, わたくしは *sa ya etam evam upāste tejasvī ha bhavati* を「彼をこのように瞑想する人は輝くようになる」と訳そう。そして, その直後に続く *tejasvinī hāsyā prajā bhavati* という文句を, わたくしは「彼の子孫は輝くようになる」と訳したい。

II, 1, 4 (訳)——カールギヤは言った——「あの電光のなかの人間, まさに彼を, わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや, 彼について, あなたは語らないように! 実に, わたくしは彼を輝いているものとして瞑想する。彼をこのように瞑想する人は輝くようになる。彼の子孫は輝くようになる。」

II, 1, 5—sa hovāca gargyo ya evāyam ākāṣe puruṣa etam evāhaṁ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṁvadiṣṭhāḥ pūrṇam apravartiti vā ahaṁ etam upāsa iti sa ya etam evam upāste pūryate prajayā paśubhir nāsyāsmāl lokāt prajodvartate ||

ここでもまた、引き続き、繰り返しの文句にわれわれは接する。そして更に、*upās* と願望成就が直結されていることに、われわれは気付かざるを得ない。第5節は次の文句と共に始まる——sa hovāca gārgyo ya evāyam ākāṣe puruṣa etam evāhaṁ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṁvadiṣṭhāḥ. 上のテキストにおける新しい文句は、ya evāyam ākāṣe puruṣa だけである。そして ya evāyam ākāṣe puruṣa は、「虚空のなかのこの人間」を意味する。

Pūrṇam apravartiti vā ahaṁ etam upāsa iti を、わたくしは「実に、わたくしはこれを満たされたもの、不動のものとして瞑想する」と翻訳する。この文句に対応するのは、チャーンドーギヤ・ウパニシャッド, III, 12, 9 である。そこにおいて、われわれは tad etat pūrṇam apravarti pūrṇam apravartinim śriyaṁ labhate ya evaṁ veda という文句を見いだす。二つのテキストによって例証されるように、わたくしは ahaṁ etam upāsa iti および ya evaṁ veda の間に親近性を見いだす。

「実に、わたくしは彼を満たされたもの、不動のものとして瞑想する」と語った後で、アジャータシャトルは次のように言う——sa ya etam evam upāste pūryate prajayā paśubhir nāsyāsmāl lokāt prajodvartate, と。このテキストを、わたくしは次のように翻訳する——「彼をこのように瞑想する人は、子孫および家畜によって満たされる。彼の子孫は、この世から滅亡しない」と。われわれは、*upās* の実作用的な作用を認める。しかるに、少し前にわたくしの引用したチャーンドーギヤ・ウパニシャッド (III, 12, 9) の文句を、われわれはもう一度思い出そう——tad etat pūrṇam apravarti pūrṇam apravartinim śriyaṁ labhate ya evaṁ veda. チャーンドーギヤ・ウパニシャッドのこのテキストを、わたくしは次のように訳したい——「これは満たされたもの、不動のものである。このように知る人は、満たされた、不動の幸福を獲得する」と。「このように瞑想する人」

および「このように知る人」は、それぞれ子孫および家畜に満たされ、不動の幸福あるいは繁栄を獲得する。*Ya evam upāste* および *ya evam veda* の間に実質的な相違は存在しないというのが、わたくし自身の考えである。*Upās* には、知的な認識の一面も認められる。しかし同時に、それは依然として生産的な認識であり、実用的な効果を生み出す心理作用でもある。

II, 1, 5 (訳)——ガールギヤは言った——「虚空のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼を満たされたもの、不動のものとして瞑想する。彼をこのように瞑想する人は、子孫および家畜によって満たされる。彼の子孫は、この世から滅亡しない」と。

II, 1, 6——*sa hovāca gārgyo sa evāyaṃ vāyau puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhā indro vaikuṇṭho 'parājitā seneti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste jiṣṇur hāparājiṣṇur bhavaty anyatastyajāyī ||*

Sa hovāca gārgyo... *saṃvadiṣṭhā* という文句の次に、*indro vaikuṇṭho 'parājitā seneti vā aham etam upāsa iti*, および *sa ya etam evam upāste jiṣṇur hāparājiṣṇur bhavaty anyatastyajāyī* という文句が続く。*Indro vaikuṇṭha* は固有名詞である。それゆえに、わたくしはこの文句を翻訳しない。しかしジャンカラの注釈によれば、次のように解釈される——*indraḥ parameśvaro vaikuṇṭho 'prasahyo*, と。この解釈によれば、*indro vaikuṇṭha* は“抵抗し難い主”と訳されるであろう。ラダクリシナンはジャンカラの注釈に基いて *indro vaikuṇṭha* を *as the lord, as the irresistible* と英訳している。*Aparājitā senā* は、打ち勝ち難い軍隊、無敵の軍隊を意味する。それは、かつて敵によって征服されたことのない軍隊を意味する。*Indro vaikuṇṭho 'parājitā seneti vā aham etam upāsa iti* を、わたくしは「実に、わたくしは彼をインドラ・ヴァイクンタとして、無敵の軍隊として瞑想する」と訳そう。

Sa ya etam evam upāste jīṣṇur hāparājīṣṇur bhavaty anyatastyajāyī に関して、わたくしは若干のコメントを加えたい。Jīṣṇu について、シャンカラは jayanaśilo と注釈している。Aparājīṣṇu について、彼は na parair jitasvabhāvo bhavati と注釈している。Jīṣṇu は、“勝利を収めた”，aparājīṣṇu は、“敵によって征服され得ない”というほどの意味である。Jīṣṇu および aparājīṣṇu に関しては、特に問題はない。しかし anyatastyajāyī は極めて奇妙な語形である。ヴェーダ文献に関する限り、この箇所においてのみ、この語形が現われる。われわれは、anyatastyajāyī を anyatas-tya-jāyī と分析してもよい。しかし現実には、anyatas-tya-jāyī と分析するのが自然である。おそらく anyatastyā は“敵”を意味するのであろう。シャンカラは、anyatastyā を敵 (sapatna) と解釈している。それゆえに sa ya etam evam upāste jīṣṇur hāparājīṣṇur bhavaty anyatastyajāyī を、わたくしは次のように翻訳する——「彼をこのように瞑想する人は、勝利を収め、無敵になり、敵を征服する」と。

II, 1, 6 (訳)——ガールギヤは言った——「風のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼をインドラ・ヴァイクンタとして、無敵の軍隊として瞑想する。彼をこのように瞑想する人は、勝利を収め、無敵になり、敵を征服する。」

II, 1, 7——sa hovāca gārgyo ya evāyam agnau puruṣa etam evāhaṁ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṁvadiṣṭhā viṣāsahir iti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste viṣāsahir ha bhavati viṣāsahir hāsyā prajā bhavati ||

Viṣāsahi を、シャンカラは marṣayitā pareṣām と注釈している。彼のこの注釈に基づき、ラダクリシナンは viṣāsahi を forbearing と英訳している。もしも viṣāsahi をこのように解釈すれば、この語は敵に対して寛大になる、敵を忍耐するということを意味するであろう。しかし、わたくしは、ここでは viṣāsahi を“勝利を収めた”と解釈する。わたくしは、

ここではシャンカラの注釈を採用しない。

II, 1, 7 (訳)——ガールギヤは言った——「火のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼を勝利を収めたものとして瞑想する。彼をこのように瞑想する人は、勝利を収めるようになる。彼の子孫は、勝利を収めるようになる」。

II, 1, 8——*sa hovāca gārgyo ya evāyam apsu puruṣa etam evāham brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin samvadiṣṭhāḥ pratirūpa iti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste pratirūpaṁ haivainam upagacchati nāpratirūpam atho pratirūpo 'smāj jāyate ||*

Pratirūpa を、わたくしは暫定的に “よく似ているもの”，“生き写し” と翻訳しよう。それゆえに、*pratirūpa iti vā aham etam upāsa iti* を、わたくしは「実に、わたくしは彼をよく似ているものとして瞑想する」と翻訳しよう。そして、その直後のテキストは次の通りである——*sa ya etam evam upāste pratirūpaṁ hainam upagacchati nāpratirūpam*。ここで *pratirūpa* および *apratirūpa* が対比される。ドイッセンは、両語をそれぞれ *Wohlgestaltetes* および *Missgestaltetes* と訳している。*Pratirūpa* および *apratirūpa* を、シャンカラの注釈に基づいて “快適なもの” および “不快なもの” と、このようにわれわれは訳してもよい。しかし、わたくしは両語を “よく似ているもの” ないし “よく似ていないもの” と訳した。それゆえに、*sa ya etam evam upāsta pratirūpaṁ hainam upagacchati nāpratirūpam* を、わたくしは次のように訳した——「彼をこのように瞑想する人、その人にはよく似ていないものではなく、よく似ているものが近づく」と。「彼をこのように瞑想する人」(*sa ya etam evam upāste*) という文句を、スナールは *A celui qui le considère ainsi* と訳している。*Sa ya etam evam upāste* を、ミュラーは *Whoso adores him thus*、ドイッセンは *Wer diesen also verehrt* と訳している⁴⁾。

さて、アジャータシャトルはこの節の最後において次のように言っている——*atho pratirūpo 'smāj jāyate*, と。Atho は、もちろん、*atha-u* に分解される。Saṃdhi の法則によって、*atha-u* は *atho* になる。Atho *pratirūpo 'smāj jāyate* を、わたくしは次のように翻訳する——「そして今や、彼からよく似たもの(=よく似た息子)が生まれる」と。

II, 1, 8 (訳)——ガールギヤは言った——「水のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼をよく似ているものとして瞑想する。彼をこのように瞑想する人、その人にはよく似ていないものではなく、よく似ているものが近づく。そして今や、彼からよく似ているものが生まれる」。

II, 1, 9——*sa hovāca gārgyo ya evāyam ādarśe puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhā rociṣṇur iti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste rociṣṇur ha bhavati rociṣṇur hāsyā prajā bhavaty atho yaiḥ sannigacchati sarvāṃs tān atirocate ||*

Ādarśa は鏡を意味する。そして *rociṣṇu* は“輝いている”，“照っている”というほどの意味である。シャンカラは、*rociṣṇur diptisvabhāvaḥ* と注釈している。Ati-ruc は“より強い光で圧倒する”というほどの意味である。それはまた，“輝きにおいて優る，しのぐ”というふうにも訳される。わたくしの使用したテキストには *sannigacchati* と記されているが、インド版の普通の語形は *saṃnigacchati* である。Saṃni-gam は，“出会う”，“会う”というほどの意味である。

II, 1, 9 (訳)——ガールギヤは言った——「鏡のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼を輝いているものとして瞑想する。彼をこのように瞑想する人は輝くようになる。彼の子孫は輝くようになる。そして今

や、誰と彼が会おうと、彼は彼らのすべてを輝きにおいてしのぐ。」

II, 1, 10—sa hovāca gārgyo ya evāyaṃ yantaṃ paścāc chabdo
'nūdety etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā
maitasmin samvadiṣṭhā asur iti vā aham etam upāsa iti sa ya
etam evam upāste sarvaṃ haivāsmiṃ loka āyur eti nainaṃ
purā kālāt prāṇo jahāti ||

Ya evāyaṃ yantaṃ paścāc chabdo 'nūdety etam evāhaṃ brahmo-
pāsa iti を、わたくしはシャンカラの注釈を参照しながら次のように翻訳
したい——「人が行く時に彼の背後で生じるこの音、まさにこれを、わたく
しはブラフマンとして瞑想する」⁵⁾と。Asur iti vā aham etam upāsa
iti という文章に関して、シャンカラは asuḥ prāṇo jīvanahetur iti と
注釈している。彼によれば、asu は生命の原因としての息、あるいは生氣
を意味する。しかし asu は、同時に“生命”をも意味する語である⁶⁾。
もちろん、この語をわれわれはベートリンクのように Lebenshauch (生
氣)と訳してもよい。ドイッセンもまた、asu をベートリンクと同じよう
に訳している。しかしながら、ミュラー、ヒューム、およびラダクリシナ
ンは、この語を life と英訳している。しかるにスナールだけは、asu を
le souffle, すなわち“息”とフランス語に翻訳している。Asur iti vā
aham etam upāsa iti を、わたくし自身は次のように訳したいと思う——
「実に、わたくしはこれを生氣として瞑想する」と。Asu と密接な関係に
あるのは āyus である。Āyus には、もちろん、生命という意味もある。
しかし、わたくしは āyus を“生存の期間”あるいは“寿命”と解釈し
たい。それゆえに、sa ya etam evam upāste sarvaṃ haivāsmiṃ loka
āyur eti を、わたくしは「これをこのように瞑想する人は、この世におい
てまさに寿命を全うする」と訳したい。Sarvaṃ . . . āyur eti という表現
に関する限り、āyus を生存の期間として理解することは可能である。古代
インドにおいては、100年間生きることが“寿命を全うする”ことと考え
られた。寿命を全うする前に死ぬことは、古代インドにおいて不幸である
とみなされた。このことを念頭に置けば、アジャータシャトルの次の言葉
は容易に理解される。王は次のように言う——nainaṃ purā kālāt prāṇo

jahāti, と。すなわち、彼は「時の来る前に、息は去らない」と言ったのである。しかしジャンカラは、次のように興味深い解釈をしている。彼によれば、カルマン(=過去の業)によって獲得された寿命は、カルマンの結果の断絶される時よりも以前に尽きない。たとえ病気などによって人が苦しめられているとしても、彼の息は彼を去らない——*yathopāttaṃ karmaṇā 'yuh karmaphalaparicchinnakālāt purā pūrvam rogādibhiḥ piḍyamānam apy enaṃ prāṇo na jahāti.*

II, 1, 10 (訳)——ガールギヤは言った——「人が行く時に彼の背後で生じるこの音、まさにこれを、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、これについて、あなたは語らないように！ 実に、わたくしはこれを生氣として瞑想する。これをこのように瞑想する人は、この世において、まさに寿命を全うする。時の来る前に、息は去らない。」

II, 11, 11——*sa hovāca gārgyo ya evāyaṃ dikṣu puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin samvadiṣṭhā dvitīyo 'napaga iti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste dvitīyavān ha bhavati nāsmād gaṇaś chidyate ||*

Dvitīyo 'napaga iti vā aham etam upāsa iti を、わたくしは「実に、わたくしは彼を離れられない伴侶として瞑想する」と翻訳したい。遂語的には、*dvitīya* は *the second* (ミュラー、ラダクリシナン) あるいは *le second* (スナール) である。しかし、名詞として使用されれば、この語は“仲間”、“伴侶”あるいは“同伴者”などを意味する。*Dvitiyavat* も同様である。それは“第二者を有する”ないし“伴侶を有する”というふうに訳されよう。

II, 1, 11 (訳)——ガールギヤは言った——「諸方角のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼を離れられない伴侶として瞑想する。彼をこのよ

うに瞑想する人は、伴侶を有するようになる。彼のグループは、彼から断ち切られない」。

II, 1, 12—sa hovāca gārgyo ya evāyaṃ chāyāmayah puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhā mṛtyur iti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāste sarvaṃ haivāsmiṃ loka āyur eti nainaṃ purā kālān mṛtyur āgacchati ||

II, 1, 12 (訳)——ガールギヤは言った——「影から成るこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータジャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼を死として瞑想する。彼をこのように瞑想する人は、この世においてまさに寿命を全うする。時の来る前に、死は彼に近づかない。」

II, 1, 13—sa hovāca gārgyo ya evāyaṃ ātmani puruṣa etam evāhaṃ brahmopāsa iti sa hovācājātaśatrur mā maitasmin saṃvadiṣṭhā ātmanvīti vā aham etam upāsa iti sa ya etam evam upāsta ātmanvī ha bhavaty ātmanvinī hāsyā prajā bhavati sa ha tūṣṇīm āsa gārgyaḥ ||

当該のテキストにおいて問題になるのは、ātman の意味である。*Ātmani puruṣaḥ* および *ātmanvīn* とは、一体、何を意味するのであろうか？ シャンカラはアートマンに関して *ātmani prajāpatau buddhau ca hr̥di* と注釈している。私見によれば、シャンカラのこの注釈は役に立たない。ドイッセンは、この箇所における ātman を Körper と訳している。ミュラーおよびヒュームは、それを body, スナールも corps と訳している。*Ātman* は、彼らによって *śarīra* として理解されている。ベートリンクは、このアートマンを Selbst, ラダクリッナンは self と訳している。わたくし自身は、この“アートマン”を“自己”と訳したいと思う。私見によれば、ここにおけるアートマンは身体などを有する自己、現象形態として

の自己に他ならない。それゆえに、わたくしはアートマンを無造作に“自己”と翻訳する。同様に、私見によれば *ātmanvin* は“身体を有する”ことではなく、“自己を有する”ことを意味する。

II, 1, 13 (訳)——ガールギヤは言った——「自己のなかのこの人間、まさに彼を、わたくしはブラフマンとして瞑想する」と。アジャータシャトルは言った——「いや、彼について、あなたは語らないように！ 実に、わたくしは彼を自己を有するものとして瞑想する。彼をこのように瞑想する人は、自己を有するようになる。彼の子孫は、自己を有するようになる。そこで、ガールギヤは沈黙した。

II, 1, 14——*sa hovācājātaśatrur etāvan nū³ ity etāvad dhīti naitāvatā viditaṃ bhavatīti sa hovāca gārgya upa tvā yānīti ||*

ブラフマンの瞑想に関するガールギヤの提示は、ことごとくアジャータシャトルによって退けられた。次の言葉は、ガールギヤに対するアジャータシャトルの“最後の止め”である——*etāvan nū³ iti*——「これだけか？」と。*Nū* は、ウパニシャッドにおいては *nu* と記される。それゆえに、われわれは *etāvan nv iti* と書いてもよい。「これだけか？」ということは、「あなたによって知られていることは、これだけなのか？」、あるいは「あなたの知っていることは、これだけか？」という意味である。ベートリンクは、*etāvan nv iti* を《*Ist das Alles?*》と訳している。アジャータシャトルのこの問いに対して、ガールギヤは *etāvad dhīti* と答えている——「実に、これだけである」と。ガールギヤがブラフマンに関して知っていることは、「実に、これだけである」。このガールギヤの答えに対して、アジャータシャトルは更に次のように言う——*naitāvatā viditaṃ bhavatīti*, と。この文句に対して、シャンカラは *naitāvatā viditena brahma viditaṃ bhavatīty āhājātaśatruḥ* と注釈している。*Naitāvatā viditaṃ bhavatīti* を、わたくしは「これだけでは、(ブラフマンの本質は)知られていない」と訳したい。アジャータシャトルのこの反論に対して、ガールギヤは次のように答えて彼の教えを乞う——*sa hovāca gārgya upa tvā yānīti*, と。*Upa tvā yāni* は、*upa tvā ayāni* と分析される⁷⁾。そして、

upa-yāni は upa-i に還元される。 $\sqrt{\text{I}}$ の Subjunctive, Parasmaipada 一人称単数 ayāni に upa という前接部が接続されて upā-ayāni になった。Upa-i は、... の許に弟子入りするというほどの意味である。それゆえに、sa hovāca gārgyo upa tvā yānīti を、わたくしは「ガールギヤは言った——『わたくしは、あなたの許に弟子入りしよう』」と訳したい。

II, 1, 14 (訳)——アジャータシャトルは言った——「これだけか?」と。「実に、これだけである」と(ガールギヤは答えた)。「これだけでは、(ブラフマンは)知られていない」と(アジャータシャトルは言った)。そこで、ガールギヤは言った——「わたくしは、あなたの許に弟子入りしたい」と。

II, 1, 15——sa hovācājātaśatruḥ pratilomaṃ caitad yad brāhmaṇaḥ kṣatriyam upeyād brahma me vakṣyatīti vy eva tvā jñapayīṣyāmīti taṃ pāṇāv ādāyottasthau tau ha puruṣam sup-tam ājagmatus tam etair nāmabhir āmantrayāñ cakre bṛhan pāṇḍaravāsaḥ soma rājann iti sa nottasthau taṃ pāṇinā 'peṣaṃ bodhayāñ cakāra sa hotthasthau ||

まず最初に、わたくしは pratilomaṃ caitad yad brāhmaṇaḥ kṣatriyam upeyād brahma me vakṣyatīti について説明しよう。Pratiloma は anuroma の逆である。毛 (loman) に逆らっているというのが prati-loma の本来の意味である。自然の秩序に反している、世間の慣習に逆らっているというのが、pratiloma である。ここから、この語をわたくしは“顛倒している”と訳したいと思う。Upeyād は、upa-iyāt に分解される。Iyāt は、 $\sqrt{\text{I}}$ の Optative, Parasmaipada, 三人称単数である。すでに述べたように、upa-i は“...の許に弟子入りする”ことである。わたくしは pratilomaṃ caitad yad brāhmaṇaḥ kṣatriyam upeyād brahma me vakṣyatīti を次のように訳そう——『彼(クシャトリヤのアジャータシャトル)はわたくしにブラフマンを告げるであろう』と考えて、ブラフマンがクシャトリヤの許に弟子入りするのは自然の秩序に反する」と。

しかるにアジャータシャトルは、ガールギヤにブラフマンについて教え

る——vy eva tvā jñāpayiṣyāmīti, と。Vy-jñāpayiṣyāmi は, vi-jñā から派生された語である。Jñā の causative は jñāpayati (三人称単数現在, Parasmaipada) であり, その未来形は jñāpayiṣyati である。Vy と jñāpayiṣyati というように分離するのは, ヴェーダにおいては普通である。人は, そのような文法現象を tmesis と呼ぶ。その名残りが, 古いウパニシャッドに散見する。Vy eva tvā jñāpayiṣyāmīti を, わたくしは「わたくしは, あなたに(ブラフマンを)認識させるであろう」と訳したい。「わたくしは, あなたに教えよう」と訳す方が流暢な訳である。スナールの訳 (Je vais t'instruire), あるいはドイッセンの訳 (Nun, ich will dich belehren) などは流暢である。しかし, わたくしは vi-jñā (認識する) の原義を忠実に伝えようとした。しかし vijñā の Causative を “教える” と訳すのも普通である。それゆえに, 「わたくしは, あなたに(ブラフマンの本質を)教えよう」と訳してもよい⁸⁾。

Taṃ pāṇāv ādāyottasthau tau ha puruṣaṃ suptam ājagmatus——このテキストにおいて *puruṣa* は太陽および月などのなかの人間ではなく, 生身の人間として理解される。Ādāyottasthau は, ādāya-uttasthau と分析される。そして, ut-tasthau は ut-sthā から派生される。Tasthau は Sthā の完了形である。Ut-thā (\sqrt{ud} -Sthā) は “立ち上る” という意味である。同様に ā-jagmatus も ā-Gam の完了形である。Supta は, Svap の過去分詞である。Taṃ pāṇāv ādāyottasthau tau ha puruṣaṃ suptam ājagmatus を, わたくしは次のように訳したい——「彼の手を取って, 彼(アジャータシャトル)は立ち上った。両人は, 眠っている人の許にやって来た」と。眠っている人に向かって, アジャータシャトルは次のような心理的な実験を試みた——tam etair nāmabhir āmantrayāñ cakre br̥han pāṇḍaravāsaḥ soma rājann iti. Āmantrayāñ cakre は, Periphrastic Perfect である。Āmantray (-āmantrayate) は重複されないので, この動詞の対格に抽象的女性名詞を作り, それに重複された kṛ, as の完了形を付け加えて完了形を作る。それゆえに, われわれは āmantrayāñ cakre という形を得る。Āmantray は, “呼び掛ける” という意味である。Bodhayāñ cakre も同様である。Budh の Causative は bodhayati である。Bodhayāñ-kṛ は, “目覚めさせる” ことである。

II, 1, 15 (訳)——アジャータシャトルは言った——「彼はわたくしにブラフマンを告げるであろう」と考えて、ブラフマンがクシャトリヤの許に弟子入りするのは自然の秩序に反する。しかし、わたくしはあなたに(ブラフマンを)認識させるであろう。彼の手を取って、彼(アジャータシャトル)は立ち上った。両人は、眠っている人の許にやって来た。偉大な、白衣を着ているもの、ソーマ王よ！ と言って、彼はこれらの名前によって彼に呼び掛けた。彼は起き上らなかった。手で触れて、彼は彼を目覚めさせた。彼は起き上った。

II, 1, 16——sa hovācājātaśatrur yatraiṣa etat supto 'bhūd ya eṣa vijñānamayaḥ puruṣaḥ kvaṣa tadā 'bhūt kuta etad āgād iti tad u ha na mene gārgyaḥ ||

アジャータシャトルは、ガールギヤに対してブラフマンについて教えるはずであった。しかし実際には、アジャータシャトルは“認識から成る人間”について説明しただけである。しかしながら、“認識から成る人間”は、実質的に“自己”(アートマン)を意味する。ガールギヤの関心がブラフマンに向けられたのに対し、アジャータシャトルの関心はアートマン(=本来的自己)に向けられていたというのが、わたくしの解釈である。II, 1, 16 に関して、文法的に特に問題になる箇所はない。Yatraiṣa etat supto 'bhūd という文において、etat は副詞として使用されている。Ya eṣa vijñānamayaḥ puruṣaḥ kvaṣa tadā 'bhūt に関しても、わたくしは特に言うべき言葉を持たない。Mene は man の完了形 (Ātmanepada) である。シャンカラは mene を jñātavān と注釈している。Man は、元来、“思う”、“考える”、“みなす”などというほどの意味である。ここではシャンカラの注釈に基づいて、わたくしは meme を翻訳した。

II, 1, 16 (訳)——アジャータシャトルは言った——「彼がこのような眠っていた時、その時この認識から成る人間はどこにいたのか、彼はどこからこのように戻って来たのか？」と。そしてガールギヤは、それを知らなかった。

II, 1, 17—sa hovācājātaśatrur yatraiṣa etat supto 'bhūd ya eṣa vijñānamayaḥ puruṣas tad eṣāṃ prāṇānāṃ vijñānena vijñānam ādāya ya eṣo 'ntarhṛdaya ākāśas tasmiṇ chete tāni yadā grhṇāty atha haitat puruṣaḥ svapiti nāma tad grhīta eva prāṇo bhavati grhītā vāg grhītaṃ cakṣur grhītaṃ śrotraṃ grhītaṃ manaḥ ||

Vijñānamayaḥ puruṣaḥ は大宇宙の原理ではなく、人間のなかの人間、本来的な自己である。Sa hovācājātaśatrur yatraiṣa etat supto 'bhūd ya eṣa vijñānamayaḥ puruṣas tad eṣāṃ prāṇānāṃ vijñānena vijñānam ādāya ya eṣo 'ntarhṛdaya ākāśas tasmiṇ chete——このテキストを、わたくしは次のように訳そう——アジャータシャトルは言った——「この人間がこのように眠っていた時、この認識から成る人間は認識によってこれらの生气(=感覚器官)の認識をとらえて、心臓における虚空のなかに横たわる」と。シャンカラは ākāśa (虚空) によって最高のアートマンが意味されると注釈している。しかし文字通りには、認識から成る人間が“心臓における虚空のなかに”横たわるのである。

認識から成る人間がもろもろの生气の認識をみずから取って心臓における虚空のなかに横たわる時、このプルシャは完全に生氣ないし感覚器官を把握し、その結果、それらの器官の作用はやむ。それゆえに、アジャータシャトルは次のように言う——tāni yadā grhṇāty atha haitat puruṣaḥ svapiti nāma, と。ここで tāni と言われるのは、シャンカラの注釈によれば vāgāder vijñānāni である。言葉などの感覚器官をプルシャが“取る”あるいは“とらえる”時、その時に「人間は眠る」と、このように言われる。そして更に、アジャータシャトルは次のように言う——tad grhīta eva prāṇo bhavati grhītā vāg grhītaṃ cakṣur grhītaṃ śrotraṃ grhītaṃ manaḥ (それから息が、まさにとらえられる。言葉が、とらえられる。目が、とらえられる。耳が、とらえられる。思考器官 (manas) が、とらえられる) と。

II, 1, 17 (訳)——アジャータシャトルは言った——「この人間がこのように眠っていた時、この認識から成る人間は認識によってこれらの

生氣(=感覺器官)の認識をとらえて、心臓における虚空のなかに横たわる。それら(の生氣・感覺器官)を彼がとらえる時、その時に『人間は眠る』とこのように言われる。それから息⁹⁹が、まさにとらえられる。目が、とらえられる。耳が、とらえられる。思考器官が、とらえられる。』

II, 1, 18—sa yatraitat svapnyayā carati te hāsyā lokās tad uteva mahārājo bhavaty uteva mahābrāhmaṇa utevoccāvacam nigacchati sa yathā mahārājo jānapadān grhītvā sve janapade yathākāmaṁ parivartetaivam evaiṣa etat prāṇān grhītvā sve śarīre yathākāmaṁ parivartate ||

Svapnyayā carati は、“夢のなかをさまよう”という意味である。シャンカラは、svapnyayā を svapnavṛtṭyā と注釈している。そして夢のなかでプルシャの活動する領域——「それらは、彼(プルシャ)の世界である」(te hāsyā lokās)。Yatraitat svapnyayā carati te hāsyā lokās を、わたくしは次のように翻訳したい——「このように彼が夢においてさまよう時、それらは彼の諸世界である」と。引き続き、われわれは、tad uteva mahārājo bhavaty uteva mahābrāhmaṇa utevoccāvacam nigacchati という文章に出会う。Uccāvacam (ucca-avacam) は、双方とも nigacchati に懸かる。Uccāvacam を、わたくしは「上昇し、下降する」と翻訳したい。しかし、uteva (uta-iva) という副詞を正しく理解すれば、われわれは、いわば上昇し、いわば下降するというふう訳すべきであろう。Uccāvacam に関して、シャンカラは次のように注釈している——uccāvacam uccam ca devatvādy avacam ca tiryagtvādy uccam ivāvacam iva ca nigacchati と。そして ni-gam は、ある状態に到達するという意味である。シャンカラによれば、彼がいわば上昇し、いわば下降するというのは“彼がいわば神などになり、あるいは、いわばけだもの(獣)などになる”というほどの意味である。

このように言語的に分析してから、わたくしは tad uteva mahārājo bhavaty uteva mahābrahmaṇa utevoccāvacam nigacchati を次のように訳そう——「その時、彼はいわば大王になるか、いわば大バラモンに

なるか、いわば上昇し、下降するかである」と。

さて、夢のなかをさまよい、夢のなかで活動するプルシャ(=人間のなかの人間、あるいは魂)について、アジャータシャトル王は次のように述べている——*sa yathā mahārājo jānapadān grhītvā sve janapade yathākāmaṃ parivartetaivam evaiṣa etat prāṇān grhītvā sve śarīre yathākāmaṃ parivartate*, と。*Grhītvā* を、わたくしは一貫して“とらえて”と訳したい。しかし、ここでは文脈的に“引き連れて”と訳すことにした。*Jānapada* は *janapada* と同義語であり、“臣民”を意味する。しかし *janapada* の複数形は、“国土”あるいは“領地”、“領土”などを意味する。*Sa yathā...evam evaiṣa...* における *eṣa* は、生身の人間ではなく“認識から成る人間”すなわちアートマンを指す。*Sa yathā mahārājo jānapadān grhītvā sve janapade yathākāmaṃ parivartetaivam evam eṣa etat prāṇān grhītvā sve śarīre yathākāmaṃ parivartate*——このテキストを、わたくしは次のように訳す——「大王が臣民を引き連れて随意に自己の領地を巡回するように、このように彼はこのように生氣(感覚器官)をとらえて自己の身体のなかを随意に動き回る」と。

II, 1, 18 (訳)——「このように彼が夢においてさまよう時、それらは彼の諸世界である。その時、彼はいわば大王になるか、いわば大バラモンになるか、いわば上昇し、下降するかである。大王が臣民を引き連れて随意に自己の領地を巡回するように、このように彼はこのように生氣(感覚器官)をとらえて自己の身体のなかを随意に動き回る。」

II, 1, 19——*atha yadā suṣupto bhavati yadā na kasya cana veda hitā nāma nāḍyo dvāsaptatiḥ sahasrāṇi hṛdayāt purītatam abhipratiṣṭhante tābhiḥ pratyavasṛpya purītati śete sa yathā kumāro vā mahārājo vā mahābrāhmaṇo vā 'tighnīm ānandasya gatvā śayītaivam evaiṣa etac chete ||*

Su-ṣupta は、“熟睡している”こと、*suṣupti* は、夢を見ない深い眠りを意味する。シャンカラの注釈によれば、特殊の認識が存在しない時に、人は熟睡していると言われる。*Atha yadā suṣupto bhavati* という文句

を、わたくしは次のように翻訳する——「しかし人が熟睡する時」と。しかし、この文句は更に続く——*yadā na kasya cana veda*, と。この文句は、「人が何ひとつ知らない時」と訳される。熟睡している時、人は何ものについても認識しないということが、上の文句によって意味される。「しかし、人が熟睡する時、人が何ひとつ意識しない時」、どのようなことが眠っている人間に起こるのであろうか？ この問いに対して、アジャータシャトルはまず最初に次のように答える——*hitā nāma nāḍyo dvā-saptatiḥ sahasrāṇi hrdayāt puritatam abhipratiṣṭhante*, と。その時、「ヒター (*hitā*) と称せられる 7 万 2 千の血管が心臓から心嚢にまで達する」のである。わたくしは、「心臓から心嚢にまで達する」と訳したけれども、シャンカラの注釈によれば「心臓から心嚢だけでなく全身に広がる」と、われわれは訳すべきであろう。そして認識から成る人間は「これらの血管を通して忍び込み、心嚢において休む」(*tābhiḥ pratyavasṛpya puritati śete*) のである。

認識から成る人間が心嚢に横たわって休息する状態を、アジャータシャトルは次の比喻によって説明する——*sa yathā kumāro vā mahārājo vā mahābrāhmaṇo vā 'tighnīm ānandasya gatvā śayītaivam evaiṣa etat chete*, と。*Atighnīm ānandasya* を、ベートリンクは *Höhepunkt der Wonne*, スナールは *comble de la félicité* と訳している。シャンカラは *atighnīm atīsayena duḥkhaṃ hantīty atighny ānandasyāvasthā sukhāvasthā* と注釈している。ミュラー、ヒューム、およびダクリシナンは、シャンカラの注釈に基づいて *atighnīm ānandasya* を英訳している。例えば、この文句をミュラーは *the summit of happiness*, ヒュームおよびダクリシナンは *the summit of bliss* と訳している。わたくし自身は、*sa yathā kumāro vā mahārājo vā mahābrāhmaṇo vā 'tighnīm ānandasya gatvā śayītaivam evaiṣa etat chete* を次のように訳そう——「子供あるいは大王あるいは大バラモンが歓喜の絶頂に達して休むように、まさにこのように彼(プルシャ)は休む」と。歓喜の絶頂に達して休むということは、実質的には“人は熟睡する”ということを示唆する。

II, 1, 19 (訳)——「しかし人が熟睡する時、人が何ひとつ意識しない時、ヒターと称せられる 7 万 2 千の血管が心臓から心嚢にまで達する。

これらの血管を通して忍び込み、彼は心嚢において休む。子供あるいは大王あるいは大バラモンが歓喜の絶頂に達して休むように、まさにこのように彼は休む。」

II, 1, 20—sa yathorṇanābhis tantunoccared yathā 'gneḥ kṣudrā visphulingā vyuccaranty evam evāsmād ātmanaḥ sarve prāṇāḥ sarve lokāḥ sarve devāḥ sarvāṇi bhūtāni vyuccaranti tasyopaniṣat satyasya satyam iti prāṇā vai satyaṃ teṣāṃ eṣa satyam ||

Sa yathorṇanābhis tantunoccared yathā 'gneḥ kṣudrā visphulingā vyuccaranty に関しては、文法的に特に問題はない。「蜘蛛が糸に沿って現われるように、火から小さな火花が種々の方向に現われるように、」——このように、わたくしは訳したい。Evam evāsmād ātmanaḥ sarve prāṇāḥ sarve lokāḥ sarve devāḥ sarvāṇi bhātāni vyuccaranti——この文句を、わたくしは次のように翻訳する——「まさにこのように、この自己(アートマン)から一切の生氣(感覚器官)、一切の世界、一切の神々、一切の存在が種々の方向に現かれる」と。ガールギヤのテーマはブラフマンであったが、アジャータシャトルは“認識から成る人間”すなわち“本来的自己”(ātman)を説いている。ブラフマンについて説明すると称しながら、アジャータシャトルの真のテーマはブラフマンよりもむしろアートマンであるようにわたくしには思われる。アジャータシャトルによれば、アートマンは現象の背後に横たわっている本来的自己、すなわち“真実の世界”である¹⁰⁾。

さて、*tasyopaniṣat satyasya satyam* というあの有名な文句を、われわれはどのように訳すべきであろうか？ ウパニシャッドをどう訳すかは非常に重要である。この文句を、ドイッセンは *Sein Geheimname (upaniṣad) ist: „die Realität der Realität“* と訳している。ドイッセンの敵対者であるベートリンクもまた、この文句を *Die Wahrheit der Wahrheit ist seine (des Selbst) geheime Bezeichnung* と訳している。ラダクリシナンも、この文句を *Its secret meaning is the truth of truth* と訳している。結局、ドイッセン、ベートリンク、ミュラーなどは、*upaniṣad* を“秘密の教え”として理解している。しかし、わたくしは、ウパニシャッドを

“秘密の教え”と理解することを拒絶する¹¹⁾。スナールだけが、*tasyo-paniṣat satyasya satyam* を *La connaissance de l' 'ātman est le réel du réel (le fond du réel)* と訳している。スナールは、ウパニシャッドをここの箇所を“認識”と翻訳している。確かに *upaniṣad* は *upāsana* と近縁関係にある語であり、スナールの仏訳は諸訳のなかでもっとも注目に値するように思われる。

しかしながら、*tasya-upaniṣat satyasya satyam* というテキストに関する限り、わたくしはスナールの訳を採用することをためらわざるを得ない。シャイエル (Schayer) の研究に基づいて¹²⁾、わたくしは *tasya-upaniṣat* を“それ(=アートマン)の等価”と翻訳したい。アートマンの等価あるいは同義語が“真理の直理”である——このように、わたくしは解釈する。*Satyasya satyam* という文句は、われわれに“二つの真理”あるいは“二つの世界”を連想させる。諸生氣ないし感覚器官は真理であり、アートマンはそれらの真理すなわち“真実の世界”あるいは“真実の在存”である。諸生氣ないし感覚器官は“現象”である。現象の背後に真実の存在を予想させる文句が、*satyasya satyam* である。この文句において、われわれは“二つの世界”ないし“二つの真理”説を見いだす。

II, 1, 20 (訳)——「蜘蛛が糸に沿って現われるように、火から小さな火花が種々の方向に現われるように、まさにこのようにこの本来的自己から一切の生氣、一切の世界、一切の神々、一切の存在が種々の方向に現われる。真理の真理が、それ(=アートマン)の等価である。実に真理は諸生氣であり、これ(本来的自己)がそれら(諸生氣)の真理である。」

これを以て、ガールギヤとアジャータシャトルの対話は終わる。ガールギヤが太陽、月、電光、虚空、風、火、水、鏡、方角、自己のなかの“人間” (*puruṣa*)、あるいは“人が行く時に彼の背後で生じるこの音”および“影から成る人間”をブラフマンとして熱心に求めるのに対し、アジャータシャトルは“認識から成る人間”ないし“本来的自己”を“真理の真理”として理解している。つまりアジャータシャトルによれば、“真理の真理”がアートマンの *upaniṣad*、すなわち同義語、その等価

(Äquivalent) である。ガールギヤとアジャータシャトルの対話における真のテーマはブラフマンの upāsana ではなく, “認識から成る人間” すなわち “本来的自己” である。それを “真理の真理” として熱心に求め認識することを, アジャータシャトルはガールギヤに説いたのである。

ガールギヤとアジャータシャトルの対話の次に “ブラフマンの二つの形態” に関する記述が見いだされる。しかし, この対話およびブラフマンの二つの形態に関する記述の中間に, 4 節から成る短いテキストが挿入される。わたくしは, II, 2, 1—4 を翻訳するだけにとどめよう——

II, 2, 1——yo ha vai śīśuṃ sādhānaṃ sapratyādhānaṃ sasthūnaṃ sadāmaṃ veda sapta ha dviṣato bhrātṛvyān avaruṇaddhi |
ayaṃ vāva śīśur yo 'yaṃ madhyamaḥ prāṇas tasyedam evā
'dhānam idaṃ pratyādhānaṃ prāṇaḥ sthūṇā 'nnaṃ dāma ||

II, 2, 1(訳)——実に住み家, 屋根, 柱, 綱を有する子供(祭紀の幼獣)を知っている人は, 彼を憎む 7 人の敵を制する。この真中の息が, 実にこの子供である。彼の住み家は, まさにこれ(身体)である。彼の屋根は, これ(頭)である。彼の柱は息である。彼の綱は食物である。

II, 2, 2——tam etāḥ saptākṣitaya upatiṣṭhante tad yā imā akṣan
lohinyo rājayas tābhir enaṃ rudro 'nvāyatto 'tha yā akṣann
āpas tābhiḥ parjanya yā kanīnakā tayā 'dityo yat kṛṣṇaṃ tenāg-
nir yac chuklaṃ tenendro 'dharayainaṃ vartanyā pṛthivy an-
vāyattā dyaur uttarayā nāsyānnaṃ kṣīyate ya evaṃ veda ||

II, 2, 2 (訳)——これら 7 つの不滅なものは, 彼に仕える。目のなかのこれらの赤い線によって, ルドラ神は彼と結び付けられている。それから, 目のなかの水によって, パルジャニヤ(雨神)は彼に結び付けられている。ひとみによって太陽が, それの黒い部分によって火神(Agni)が, それの白い部分によってインドラ神が彼に結び付けられている。下まつ毛によって, 大地は彼に結び付けられている。上まつ毛によって, 天は彼に結び付けられている。このように知っている

人の食物は尽きない。

II, 2, 3—*tad eṣa śloko bhavati | arvāgbilaścamaśa ūrdhva-*
budhnaśa taśmin yaśo nihiṭaṃ viśvarūpaṃ | tasyā 'śata ṛṣayaḥ
śapta tīre vāgaṣṭamī brahmaṇā śaṃvidāneti | arvāgbilaścamaśa
ūrdhvabudhna itidaṃ taśa chira eṣa hy arvāgbilaścamaśa ūrdh-
vabudhnaśa taśmin yaśo nihiṭaṃ viśvarūpaṃ iti prāṇā vai yaśo
viśvarūpaṃ prāṇān etaḍ āha tasyā 'śata ṛṣayaḥ śapta tīra iti
prāṇā vā ṛṣayaḥ prāṇān etaḍ āha vāgaṣṭamī brahmaṇā śaṃvi-
dāneti vāg dhy aṣṭamī brahmaṇā śaṃvitte ||

II, 2, 3 (訳)——それゆえに、次のような詞句がある——口を下に有し、底を上には有する杯がある。そのなかに種々の栄光が置かれている。その杯の縁に、7人の聖仙が坐る。第8のものとしての言葉は、ブラフマンと通じている。「口を下に有し、底を上には有する杯がある」というのは、この頭のことである。なぜなら、これは口を下に有し、底を上には有する杯であるから。「そのなかに種々の栄光が置かれている」というのは、実に種々の栄光が諸生氣を意味するということである。このように、彼は諸生氣に言及する。「その杯の縁に、7人の聖仙が坐る」というのは、実に聖仙は諸生氣であるということである。このように、彼は諸生氣に言及する。「第8のものとしての言葉は、ブラフマンと通じている」というのは、実に第8のものとしての言葉はブラフマンと通じるということである。

II, 2, 4—*imāva eva gotamabharadvājā¹³⁾ ayam eva gotamo*
'yaṃ bharadvāja imāva eva viśvāmitrajamadagnī ayam eva viś-
vāmitro 'yaṃ jamadagnir imāva eva vasiṣṭhakaśyapāva¹⁴⁾ ayam
eava vasiṣṭho 'yaṃ kaśyapo vāg evātrir vācā hy annaṃ adyate
'attir ha vai nāmaitaḍ yaḍ atrir iti sarvaśyāttā bhavati sarvaṃ
aśyānnaṃ bhavati ya evaṃ veda ||

II, 2, 4 (訳)——ゴータマおよびバラドヴァージャは、これらの2つ

(両耳)である。まさに、これがゴータマであり、これがバラドヴァー
ジャである。ヴィシュヴァーミトラおよびジャマドアグニは、まさに
これらの2つ(両眼)である。まさに、これがヴィシュヴァーミトラで
あり、これがジャマドアグニである。ヴァンシタ および カシュヤパ
は、まさにこれらの2つ(二つの鼻孔)である。まさに、ヴァンシタは
これであり、カシュヤパはこれである。アトリ (atri) は、まさに言葉
である。なぜなら、言葉と共に食物は食べられるからである。アトリ
(atri) と称せられるものは、実にアッティ (atti, ad の3人称単数現
在=彼は食う) である。このように知る人は一切を食べる人になり、
一切は彼の食物になる。

さて、シュローカ (*Śloka*) と呼ばれるこれらの詩句の次に、“ブラフマ
ンの二形態” に関するテキストがある。それらを、以下においてわたくし
は少しばかり検討しよう——

II, 3, 1——dve vāva brahmaṇo rūpe mūrtaṃ caivāmūrtaṃ ca
martyaṃ cāmṛtaṃ ca sthitaṃ ca yac ca sac ca tyam ca ||

Mūrta は、“身体” ないし “形態” を意味する。Amūrta は, mūrta
の逆である。Sthita は Sthā の過去受動分詞, yac (=yat) は \sqrt{T} の
現在分詞である。sac (=sat) ca tyam ca は satya (sat-tya) の人為的な
分析, あるいは “言葉の遊び” である。Satyam は, ここでは sat-tyam
として解釈されている。

II, 3, 1 (訳)——ブラフマンには二つの形態, すなわち身体を有する
ものと身体を有しないもの, 死すべきものと不死なるもの, 静止して
いるものといきつつあるもの, および存在しているもの (sat) と “か
のもの” (tyam) とがある。

II, 3, 2——tad etan mūrtaṃ yad anyad vāyoś cāntarikṣāc caitan
martyam etat sthitaṃ etat sat tasyaitasya mūrtasyaitasya sthitas-
yaitasya sata eṣa raso ya eṣa tapati sato hy eṣa rasaḥ ||

II, 3, 2 (訳)——風および中空と異なっているこの身体を有するもの(地・水・火)、これは死すべきものである。これは静止しているものである。これは存在しているものである。ここで輝くこれ(太陽)は、この身体を有するもの、この死すべきもの、この静止しているもの、この存在しているものの本質である。なぜなら、これは存在しているものの本質であるから。

II, 3, 3——*athāmūrtaṃ vāyúś cāntarikṣaṃ caitad amṛtaṃ etad yad etat tyaṃ tasyaitasyāmūrtasyaitasyāmṛtasyaitasya yata etasya tyasyaiṣa raso ya eṣa etasmin maṇaḍale puruṣas tyasya hy eṣa rasa ity adhidaivatam ||*

II, 3, 3 (訳)——さて、風および中空は身体を有しない。これは不死である。これは行きつつある。これは“かのもの”である。この日輪のなかのこの人間(=プルシャ)は、この身体を有しないもの、この不死なるもの、この行きつつあるもの、この“かのもの”の本質である。なぜなら、これ(日輪のなかの人間)は“かのもの”の本質であるから。以上、神格に関して。

II, 3, 4——*athādhyātmam idam eva mūrtaṃ yad anyat prāṇāc ca yaś cāyam antarātmann ākāśa etan martyam etat sthitam etat sat tasyaitasya mūrtasyaitasya martyasyaitasya sthitasaitasya sata eṣa raso yac cakṣuḥ sato hy eṣa rasaḥ ||*

Adhyātman を、ミューラーはジャンカラの注釈に基づいて “with regard to the body” と訳している。スナールは、これを *par rapport à notre individu* と仏訳している。アートマンを“身体”(śarīra, deha)と解釈することは、もちろん、可能である。しかしながら、わたくしは adhyātman を“自己に関して”と訳した。

II, 3, 4 (訳)——息および自己の内部の虚空と異なっているもの、まさにこれは身体を有するものである。これは死すべきものである。

これは静止している。これは存在している。眼は、この身体を有するもの、この死すべきもの、この静止しているもの、この存在しているものの本質である。なぜなら、これは存在しているものの本質であるから。

II, 3, 5——athāmūrtaṃ prāṇas ca yaś cāyam antarātmann ākāśa etad amṛtaṃ etad yad etat tyam tasyaitasyāmūrtasyaitasyaitasy-āmṛtasyaitasya yata etasya tyasyaiṣa raso yo 'yam dakṣiṇe 'kṣan puruṣas tyasya hy eṣa rasah ||

II, 3, 5 (訳)——さて、息および自己の内部のこの虚空は、身体を有しないものである。これは不死である。これは行きつつある。これは、“かのもの”である。この右の眼のなかの人間は、この身体を有しないもの、この不死なるもの、この行きつつあるもの、この“かのもの”の本質である。なぜなら、彼は“かのもの”の本質であるから。

II, 3, 6——tasya haitasya puruṣasya rūpam | yathā mātāharaṇam vāso yathā pāṇḍvāvikam yathendragopo yathā 'gnyarcir yathā puṇḍarīkam yathā sakṛdvidyutṭam sakṛdvidyutteva ha vā asya śrīr bhavati ya evaṃ vedāthāta ādeśo neti neti na hy etasmād iti nety anyat param asty atha nāmadheyam satyasya satyam iti prāṇa vai satyam teṣām eṣa satyam ||

Tasya haitasya puruṣasya rūpam という文句に始まり ya evaṃ veda に終わる文章に関して、わたくしは特に注意を払う必要を認めない。このテキストを、わたくしは無造作に次のように翻訳する——「この人間の形態はサフラン色の衣服のようであり、白い羊毛のようであり、インドラゴーパー(ある昆虫の名)のようであり、火炎のようであり、蓮華のようであり、一度の閃光のようである。このように知っている人には、実に一度の閃光のように栄光がある」

Athāta ādeśo neti neti という文句は、検討を必要とする。Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 69, 105 において、ヒルレブラ

ントは *neti neti* を“そうではない、そうではない”と翻訳することに反論している。ヒルレブランドは *na* を肯定の意味に解釈し、*na* を „ja, fürwahr“ と翻訳することを提案している (p. 106)。例えば、彼はアイタレーヤ・ブラーフマナ、16, 20 f に言及し、*yad vai devānām neti tad eṣām om* を例証に、*na* を *om* と同義語であると解釈する。しかし、わたくしはこの箇所における *na* を *nein* の意味に解釈する。

Athāta ādeśo neti neti を、スナールは *Après cela, la formule: Non! Non!* と訳している。ベートリンクは、この文句を *Nun folgt der Ausspruch. Er lautet „nicht, nicht“* と訳している。*Neti, neti* と並んで問題になるのは、*ādeśa* をどのように翻訳するかであろう。シャンカラの注釈に基づいて *ādeśa* を *upadeśa* と理解すれば、われわれは *ādeśa* を“教え”と訳してもよい。しかしティーム (Paul Thieme) は、このようなシャンカラ流の考えを退け、*ādeśa* を ‚Substitution, Ersetzung‘ と訳すことを主張する¹⁵⁾。*Ādeśa* を、彼は同一化とも訳している。*Athāta ādeśah neti neti* を、ティームは «Nunmehr seine (des makrokosmischen und mikrokosmischen Seelenwesens: *puruṣa*) Ersetzung (die seine mystische Wahrheit enthüllt) と訳している。

しかし、わたくしはティームの解釈に理論的根拠を認めない。それゆえに、わたくしは彼の解釈を受け入れない。*Athāta ādeśo neti neti* を、わたくしは無造作に「さて、これから“そうではない、そうではない”という教えがある」と翻訳する。*Na hy etasmād iti nety anyat param asty*——この文句を、わたくしは次のように翻訳する——「なぜなら、“そうではない”というこれと異なり、これより高次であるものは存在しないからである」と。*Atha nāmadheyam satyasya satyam iti* という文句について、わたくしは特にふたたびここで検討する必要を認めない。この文句をベートリンクは *Der Name für die Wahrheit ist aber Wahrheit* と訳している。もちろん、このように訳すことは可能である。しかし、わたくしは「その名称は、真理の真理である」と翻訳したい。

Prāṇā vai satyam teṣām eṣa satyam に関しては、言語的に特に問題はない。「実に真理は諸生氣であり、これがそれら(諸生氣)の真理である」——このように、わたくしは翻訳しよう。このテキストは、II, 1, 20 と関連している。“これ” (*eṣa*) は、アートマンないしプルシャを示唆する。

Neti neti および satyasya satyam によって言外に意味されるのは、プルシャないしアートマンである。そして、プルシャあるいはアートマンが、われわれによって今扱われているテキストの真のテーマである。

II, 3, 6 (訳)——この人間の形態はサフラン色の衣服のようであり、白い羊毛のようであり、インドラゴーパー(ある昆虫の名)のようであり、火炎のようであり、連華のようであり、一度の閃光のようである。このように知っている人には、実に一度の閃光のように栄光がある。さて、これから“そうではない、そうではない”という教えがある。なぜなら、“そうではない”というこれと異なり、これより高次であるものは存在しないからである。その名称は、真理の真理である。実に真理は諸生氣であり、これがそれら(諸生氣)の真理である。

II, 5, 1——*iyam pṛthivī sarvesāṃ bhūtānāṃ madhvasyai pṛthivyaḥ sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asyāṃ pṛthivyāṃ tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ śārīras tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idaṃ brahmedaṃ sarvaṃ ||*

II, 5, 1 (訳)——この大地は一切の存在(生類)の蜜であり、一切の存在はこの大地の蜜である。そして、この大地のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して身体に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 2——*imā āpaḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvāsāṃ apāṃ sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam āsv apsu tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ raitasas tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idaṃ brahmedaṃ sarvaṃ ||*

II, 5, 2 (訳)——この水は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの

水の蜜である。そして、この水のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して精液に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 3—*ayam agniḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasyāgneḥ sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asminn agnau tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ vāṇmayas tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idam brahmedaṃ sarvam ||*

II, 5, 3 (訳)——この火は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの火の蜜である。そして、この火のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して言葉から成り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 4—*ayaṃ vāyuḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasya vāyoḥ sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asmin vāyau tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ prāṇas tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idam brahmedaṃ sarvam ||*

II, 5, 4 (訳)——この風は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの風の蜜である。そして、この風のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して息に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 5—*ayam ādityaḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasyā 'dityasya sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asminn āditye tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ cākṣuṣas*

tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam
amṛtam idaṁ brahmedam sarvam ||

II, 5, 5 (訳)——この太陽は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの太陽の蜜である。そして、この太陽のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して眼に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 6——imā diśaḥ sarveṣāṁ bhūtānaṁ madhvāsāṁ diśāṁ
sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam āsu dikṣu tejomayo 'mṛta-
mayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṁ śrautraḥ prātiśrutkas tejo-
mayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam
idaṁ brahmedam sarvam ||

II, 5, 6 (訳)——これらの方角は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこれらの方角の蜜である。そして、これらの方角のなかの光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 7——ayaṁ candraḥ sarveṣāṁ bhūtānaṁ madhvasya can-
drasya sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asmiṁś candre tejo-
mayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṁ mānasastejo-
mayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam
idaṁ brahmedam sarvam ||

II, 5, 7 (訳)——この月は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの月の蜜である。そして、この月のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して心に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 8——*iyam vidyut sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasyai vidyutaḥ sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asyām vidyuti tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmam taijasastejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idam brahmedaṃ sarvam ||*

II, 5, 8 (訳)——この雷光は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの雷光の蜜である。そして、この雷光のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して光に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 9——*ayam stanayitnuḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasya stanayitnoḥ sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asmin stanayitnau tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmam śābdaḥ sauvaras tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idam brahmedaṃ sarvam ||*

II, 5, 9 (訳)——この雷は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの雷の蜜である。そして、この雷のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して音声に宿り、音響のなかに宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5, 10——*ayam ākāśaḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasyā 'kāśasya sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asminn ākāśe tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmam hr̥dy ākāśas tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idam brahmedaṃ sarvam ||*

II, 5, 10 (訳)——この虚空は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの虚空の蜜である。そして、この虚空のなかの光から成り、不死か

ら成るこの人間, および自己に関して心臓のなかの虚空であり, 光から成り, 不死から成るこの人間——まさに, これがこの自己であり, この不死なるもの, このブラフマン, この一切である。

II, 5, 11—*ayaṃ dharmāḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasya dharmasya sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asmin dharme tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ dhārmasya tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idaṃ brahmedaṃ sarvaṃ ||*

II, 5, 11 (訳)——この法(ダルマ)は一切の存在の蜜であり, 一切の存在はこの法の蜜である。そして, この法のなかの光から成り, 不死から成るこの人間, および自己に関して法に宿り, 光から成り, 不死から成るこの人間——まさに, これがこの自己であり, この不死なるもの, このブラフマン, この一切である。

II, 5, 12—*idaṃ satyaṃ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasya satyasya sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asmin satye tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ sātvyas tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam amṛtam idaṃ brahmedaṃ sarvaṃ ||*

II, 5, 12 (訳)——この真理は一切の存在の蜜であり, 一切の存在はこの真理の蜜である。そして, この真理のなかの光から成り, 不死から成るこの人間, および自己に関して真理に宿り, 光から成り, 不死から成るこの人間——まさに, これがこの自己であり, この不死なるもの, このブラフマン, この一切である。

II, 5, 13—*idaṃ mānuṣaṃ sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasya mānuṣasya sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asmin mānuṣe tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo yaś cāyam adhyātmaṃ mānuṣasya tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa yo 'yam ātmedam*

amṛtam idaṃ brahmedaṃ sarvam ||

II, 5, 13 (訳)——この人類は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの人類の蜜である。そして、この人類のなかの光から成り、不死から成るこの人間、および自己に関して人類に宿り、光から成り、不死から成るこの人間——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラフマン、この一切である。

II, 5 14——*ayam ātmā sarveṣāṃ bhūtānāṃ madhvasya 'tmanah sarvāṇi bhūtāni madhu yaś cāyam asminn ātmani tejomayo 'mṛtamayaḥ puruṣo 'yam eva sa 'yam ātmedam amṛtam idaṃ brahmedaṃ sarvam ||*

II, 5, 1—13 において、われかれは *amṛtamayaḥ puruṣo* の次に *yaś cāyam adhyātman* という文句が繰り返されることを知っている。しかし、II, 5, 14 においてはこのテキストの代わりに *yaś cāyam ātmā* という文句が挿入されている。わたわれが今扱っているテキストは、5, 1—13 と異なっている。II, 5, 14 におけるアートマン (*ātman*) を、わたくしは一貫して“自己”と翻訳した。しかし、文脈上“アートマン”は異なった意味において解釈されるであろう。例えば、*yaś cāyam asminn ātmani tejomayaḥ 'mṛtamayaḥ puruṣo* というテキストにおいて、*asminn ātmani* は“この身体のなかの”と訳されるであろう。しかし *yaś cāyam ātmā* において意味されるアートマンは、本来的な自己あるいは究極的実在と解釈されるであろう¹⁶⁾。けれども、わたくしはアートマンをここでは一様に“自己”と翻訳したいと思う。このアートマンはプルシャと同じ意味において使用されている。形而上学的なアートマンは、結局、“人間のなかの人間”あるいは“本来的自己”ないし“魂”を意味する。

II, 5, 14 (訳)——この自己は一切の存在の蜜であり、一切の存在はこの自己の蜜である。そして、この自己のなかの光から成り、不死かな成るこの人間、および光から成り、不死から成る人間であるこの自己——まさに、これがこの自己であり、この不死なるもの、このブラ

フマン, この一切である。

II, 5, 15—sa vā ayam ātma sarveṣāṃ bhūtānām adhipatiḥ
sarveṣāṃ bhūtānām rājā tad yathā rathanābhau ca rathanemau
cārāḥ sarve samarpitā evam evāsminn ātmani sarvāṇi bhūtāni
sarve devāḥ sarve lokāḥ sarve prāṇāḥ sarva eta ātmānaḥ samar-
pitāḥ ||

このテキストにおいて特に注目に値するのは, *sarva eta ātmānaḥ* という文法的な形態である。ātman の複数形が使用されていることは, ウパニシャッドにおいては普通ではない¹⁷⁾。Ātmānaḥ は, おそらく個々の“自己”, “個別的な自己”を意味するものであろう。それらは, 現象形態としての自己を示唆するように思われる。

II, 5, 15 (訳)——実に, この自己は一切の存在の主であり, 一切の存在の王である。一切の車輪の輻がこしきおよび輪縁にはめ込まれるように, このように一切の存在, 一切の神々, 一切の世界, 一切の生氣, 一切のこれらの自己は, この自己にはめ込まれている。

II, 5, 16—idaṃ vai tan madhu dadhyaṇṇ āthavaṇo 'śvibhyām
uvāca | tad etad ṛṣiḥ paśyann avocat | tad vām narā sanaye
daṃsa ugram āviṣkṛṇomi tanyatur na vṛṣtim | dadhyaṇ ha yan
madhv ātharvaṇo vām aśvasya śirṣṇā pra yad im uvāceti ||

II, 5, 16 (訳)——実に, この蜜をアタルヴァンの息子ダディヤチ¹⁸⁾は, アシュヴィン双神に語った。これを見て, 聖仙は語った(リグ・ヴェーダ, I, 116, 12)——

おお, お前たち二人よ, 雷が雨を告げるように, お前たちの利得のためにお前たちのなした恐るべき驚異的行為, アタルヴァンの息子ダディヤチが馬の頭を通じてお前たちに告げたその蜜を, わたくしは明らかにする。

II, 5, 17—idaṃ vai tan madhu dadhyaṇṇ ātharvaṇo 'śvibhyāṃ
uvāca | tad etad ṛṣiḥ paśyann avocat | ātharvaṇāyāśvinā dadhīce
'śvyam śiraḥ pratyairayatam | sa vāṃ madhu pravocad ṛtā yan
tvāṣṭraṃ yaddasrāv api kakṣyaṃ vāṃ iti ||

II, 5, 17 (訳)——実に、この蜜をアタルヴァンの息子ダディヤチは、
アシュヴィン双神に語った。これを見て、聖仙は語った(リグ・ヴェ
ーダ, I, 117, 22)——

おお、アシュヴィン双神よ、お前たちはアタルヴァンの息子ダデ
ィヤチに対して馬の頭を載せた。おお、アシュヴィン双神よ、お
前たちの腋の下のくぼみに見いだされるトヴァシュトリの蜜を、
真理に忠実に彼はお前たちに告げた。

II, 5, 18—idaṃ vai tan madhu dadhyaṇṇ ātharvaṇo 'śvibhyāṃ
uvāca | tad etad ṛṣiḥ paśyann avocat | puraścakre dvipadaḥ
puraścakre caturpadaḥ | puraḥ sa pakṣi bhūtvā puraḥ puruṣa
āviśad iti | sa vā ayam puruṣaḥ sarvāsu pūrṣu purīśayo nainena
kimcanānāvṛtam nainena kimcanāsamvṛtam ||

II, 5, 18 (訳)——実に、この蜜をアタルヴァンの息子ダディヤチは、
アシュヴィン双神に語った。これを見て、聖仙は語った——

最初に (puras), 彼は二足を有するものを作った。最初に (puras),
彼は四足を有するものを作った。

最初に (puras), 彼は鳥になって精神 (puruṣa) としてとりで
(puras) に入った。

実に、この精神 (puruṣa) は一切のとりでにおいて (pūruṣu), とりで
のなかに横たわっているもの (purīśaya) である¹⁹⁾。彼によって覆われ
ていないものは何もなく、彼によって隠されているものは何もない。

II, 5, 19——*idaṃ vai tan madhu dadhyaññ ātharvaṇo 'śvibhyām uvāca | tad etad ṛṣiḥ paśyann avocat | rūpaṃ rūpāṃ pratirūpo babhūva tad asya rūpaṃ praticakṣaṇāya | indro māyābhiḥ puru-rūpa iyate yuktā hy asya harayaḥ śatā daśeti | ayaṃ vai hara-
yo 'yaṃ vai daśa ca sahasrāṇi bahūni cānantāni ca tad etad brahmāpūrvam anaparam anantaram abāhyam ayam ātmā brahma sarvānubhūr ity anuśāsanam ||*

II, 5, 19 (訳)——実に、この蜜をアタルヴァンの息子ダディヤチはアシュヴィン双神に語った。これを見て、聖仙は語った(リグ・ヴェーダ VI, 47, 18)——

彼は、あらゆる形態に適応するようになった。彼の(真実の)この形態は、(一切において)眺めるためである。

幻術 (māyā) によって、インドラ神はさまざまな形態を帯びてさまよう。なぜなら、彼のために数千の馬が繋がれているから。

実に、馬がこれである。実に、10, 数千, 多数, および無限が、これである。さて、これがブラフマンである。それは前も有せず後も有せず、内も有せず、外も有しない。ブラフマンは、一切を認識するこの自己(アートマン)である²⁰⁾。これが、教えである。

〔注〕

- 1) II, 1, 1—20; II, 2, 1—4; II, 3, 1—6; II, 5, 1, 19; II, 5, 1—19 が、わたくしの言語的検討の対象である。
- 2) わたくしの著書『ウパニシャッドの哲学』(サーラ叢書 28。平楽寺書店, 1985年9月), 187 ページ。
- 3) Upās については、『ウパニシャッドの哲学』6 ページ以下参照。
- 4) ヒルレブランドも、upās を verehren と訳している。しかし、初期ウパニッシュドに関する限り、upās には“崇拜する”という意味はない。
- 5) II, 1, 2 ないし II, 1, 9 においては、*ya evāsāv āditye puruṣa* ないし *ya evāyam ādarśe puruṣa* という文句が繰り返されている。しかるに II, 1, 10 においては *ya evāyaṃ yantaṃ paścāc chabdo...* となっている。つまり、この箇所においては *puruṣa* という語が脱落している。II, 1, 10 は、後から

挿入されたものであろうか？ II, 1, 12 の文句 *ya evāyaṁ chāyāmayah puruṣa* も, *āditye puruṣa* ないし *ādarśe puruṣa*, あるいは *ya evāyaṁ dikṣu puruṣa* (II, 1, 11) あるいは *ya evāyaṁ ātmani puruṣa* (II, 1, 13) という文脈とはやや異なっている。

- 6) ヒルレブランドは, *asu* を *das Leben* と翻訳している。
- 7) 他のインド版においては, *upa tvā 'yāni* と記されている。
- 8) サンスクリットのテキストによれば, アジャータシャトルは ガールギヤにブラフマンについて教えるというように解釈される。しかし実際には, アジャータシャトルの主要テーマは “認識から成る人間” ないし “本来的自己” (*ātman*) である。ガールギヤがブラフマンの *upāsana* を主題にしているのに対し, アジャータシャトルはブラフマンについて論じていない。 アジャータシャトルは, ブラフマンではなくアートマンについて考察している。
- 9) シャンカラの注釈によれば, *prāṇa* はここでは “鼻” を意味する——*prāṇa iti ghrāṇendriyaṁ*。
- 10) 現象界と本来的自己 (= 真実の世界) という “2つの世界” 説を, わたくしはこの箇所認める。この箇所に関する限り, ウパニシャッドとは2つの世界に関する教えである。現象界は “真理” である。しかし真実の世界すなわち本来的自己は “真理の真理” である。ウパニシャッドは, ブラフマンとアートマンの同一性を説く秘密の教えではない。ウパニシャッドは2つの世界, 2つの真理を示唆する。それは “真理の真理” (*satyasya satyam*) としての “本来的自己” を説く。 “本来的自己” が, すなわち “真理の真理” である。真理の真理が, アートマンの等価すなわちウパニシャッドである。
- 11) *Upaniṣad* の語義については, わたくしの『ウパニシャッドの哲学』4 ページ以下参照。
- 12) 『ウパニシャッドの哲学』8-10 ページ参照。
- 13) 他のインド版によれば *gotamabharadvājāv*。ここでは, わたくしは *°bharadvājāv* と読んだ。
- 14) ここでは, わたくしは *vasiṣṭhakaśyapav* と読んだ。
- 15) ティーメの *ādeśa* の解釈については, 彼の論文 *Ādeśa (Kleine Schriften, Teil I. 1971, pp. 259-267)* 参照。
- 16) Thieme, *Upanischaden Ausgewählte Stücke*, Reclam, 1968, p. 27 参照。
- 17) ウパニシャッドにおいては, 普通, 単数形が使用される。アートマンは単一の实在を意味することが少なくない。
- 18) あるいはダディヤンチ。
- 19) *Puruṣa* を *puriśaya* (*puri*, とりでのなかに + *śaya*, 横たわっているもの) と解釈するのは, 通俗語源解釈。*Puras* を “最初に” および “とりで” と二重に解釈するのは “言葉の遊び”。
- 20) 「ブラフマンは, 一切を認識するこの自己である」 (*ayam ātmā brahma sarvānubhūr*) ということがウパニシャッドの教えであるとすれば, この文章はブラフマン=アートマン説を示唆するのであろうか？ わたくしの眼には, たった今引用された文句は, 後世のヴェーダーンタ学者によって挿入されたものであるように思われる。II, 5, 16-19 においては, 究極的实在は本来的な

テーマではない。しかるに、突如として *ayam ātmā brahma sarvānubhū-
ity anuśāsanam* というテキストが現われる。そして II, 5 は、この文句を以て
終わる。II, 5, 19 の終わりの部分において、「ブラフマンは、一切を認識する
この自己である」と説かれている。前後の脈絡を顧慮して、わたくしはこの
文句を後世の人による挿入ではないかと推測する。